

珈琲の道

井上誠

珈琲の道

井上
誠

柴田書店

著者略歴 井上 誠 (いのうえまこと)

明治 31 年 3 月 7 日 山口県徳山市生まれ。

大正 10 年 早稲田大学法科中退。

神奈川県商工経済会参事，川崎商工会議所総務部長を歴任，この間著作生活に入り，コーヒーの研究にも没頭。

戦後，紀伊国屋書店をとお茶の水商事顧問。

著書：『珈琲記』（ジープ社）

『珈琲』（近代社）

『第三の珈琲』（近代社）

『珈琲物語』（井上書房）

『コーヒー入門』（社会思想社）

『珈琲の書』（柴田書店）

『珈琲誕生』（読売新聞社）

『珈琲求心』（東京書房社）他

珈 琲 の 道

昭和 54 年 3 月 10 日 初版印刷

< 検印廃止 >

昭和 54 年 3 月 20 日 初版発行

著者 © 井 上 誠

発 行 者 柴 田 孝 子

印 刷 所 中央印刷株式会社

製 本 所 和田製本工業(株)

〒113 東京都文京区本郷 3-33-5

発 行 所 株式会社 柴 田 書 店

電 話 03 (813) 6031 (代表)

振 替 口 座 東 京 8-4515

落丁・乱丁本はお取替え致します

第二話 珈琲のある幼年記 1

一 螢狩り 2

二 河沿いの家 7

三 薔薇と珈琲（Ⅰ） 12

四 薔薇と珈琲（Ⅱ） 18

第二話 珈琲のある少年記 25

一 船出 26

二 珈琲童子 31

三 玄海灘 36

四 淡路丸慕情 42

第三話 わが珈琲の歷程 53

一 由来 54

二 珈琲鑑首尾——珈琲の思想と背景——

三 エリザは居ない 65

第四話 オリエントのカーフェ 87

一 生い立ち 88

二 生豆から炒豆への転機 93

三 カーファからカーフェへの奔流 98

四 イブリクの船出 108

第五話 珈琲のあけぼの 123

一 パドヴァの若者——プロスペロ・アルピーニ—— 124

二 カイロのカーフェ散策 131

三 サラジーンの植物園 138

四 バンの木の渡海 145

第六話 近代珈琲の土壌 159

一 珈琲飲料をつくる手続の変化（先駆者たち） 160

二 ヨーロッパのコーヒー到来 167

三 大陸諸国への波及 174

四 本流の見直し 183

第七話 アメリカのコーヒー、日本のコーヒー 197

一 植民地ごろの後進性から 198

二 アメリカン・コーヒーの発展（付、日本へのコーヒーの響き） 209

三 日本のコーヒー事情 224

四 歷程の終り 236

あとがき 255

第一話

珈琲のある幼年記

一 螢 狩 り

珈琲というものが、とつぜん私の前に現われたのは、おおよそ一九〇三年前後のことである。というのは、一八九八年三月に生れ、数え年五歳から七歳まで通った幼稚園時代であつて、生れ故郷の徳山から移つた、山口の町の中を流れる河沿いの後河原うしろがわらというところに、わが家があつたころのことである。

だが、この町名はひょつとすると、中河原であつたような氣もする。この二つの町名が曖昧なのは、移り住んだ二カ所の混同からくることなのだが、前にいくらか長く住んでいた河下の町を、後河原といったような覚えの方が、やはり確かであるらしい。

その前にもカナコゾといったところに、期間は不確かだが居たけれど、そこでも豎小路たてこうじという名が記憶に混るのは、その二カ所が混同するほど近かつたのであろうか。けれども、私とすると当時の住居のあつたところは、やはりカナコゾであつたという氣がするのである。

ともかくもこのカナコゾの時代は、幼稚園に上る前の、数え年四歳ぐらいのときのことだ、

なぜか生活のひとつまだけのことが、まざまざとした印象を蘇らせる。あまりに鮮かすぎるので、奇妙な気が自分でもするけれど、これはまだ幼稚園以前の話である。

夏の日の夕暮のことであった。ひょっとすると私の人生の、最初の目覚めであったかもしれない。その時を境にして、それ以前のこととはあまり定かでないけれど、以後のことは断続的にも意外にはっきりと、想いに浮かびでることがある。

もう食事も終わったあとで、夕涼みに母（ユキ）と家の表に立っていた。すると、道の向うから三隅のおばさんと、その子供の達ちゃんという日曜学校の友達が、その先生をしている山口高等学校生徒の、佐々木お兄さん（史朗）と三人で、連れ立ってくるのが見えた。

それは私にとって、意外というよりも心外であった。史朗さんは大変な秀才で、小学校を二年、中学校も一年くらいずつ飛ばして上学年に進んだとかで、高等学校一年生といっても、確か十五歳であった。

だが、身体は人並よりも大きく、仙台という遠方から来たので、学校の寄宿舎に入っていた。私はそれらのことを聞くともなく耳にし、幼児ながらに理解していたらしい。だが、十五という年齢は、幼児にとって子供ではなく、大人であった。

私の母はその七つ年上だから二十二歳、父（右次）は母よりも十五も年上だから三十七歳で

ある。このような年齢の取合わせのためもあった、私は父よりも史朗さんを近しく感じたのは、わが家の家族のようにして来ていることが多く、母も目をかけてあげているその人を、自分で独占していると思ひ込んでいたからだ。

そんなわけで、子供同志の仲間とはいえ、達ちゃんなんかと連れ立ってくるのは「怪しからぬ」といった、嫉妬に似た気持を抱いていた。

むしろ、そうと言ってしまえない、幼児の忿懣もあった、私はその三人が近付いて来ても、自分から寄っては行かず、子供らしい愛想も見せずに立っていた。

すると、側まで来た史朗さんが、私の両脇の下に手を入れ、軽々と抱えて頭上に差し上げ、深呼吸をしたかと思うと、いきなり手を離したので、危く落ちそうになり、両手で史朗さんの首にしがみつき、胴体を抱きとめられた。

「螢狩り、ほたるがり」

と、みんながはしゃいでいる。そのうちに私も機嫌を直し、達ちゃんと前後になって、そのあたりを駆けまわっていた。

その日の教会の螢狩りに、父も連立って行ったかどうか、ほとんど想い出すことはできないけれど、そのあとで野川に落ちて溺れかけた、三つ年上の兄（勝彦）を救い出すとき、人たち

の中に父もいて手を貸していたので、来ていたのは確かであった。

山口の町外れには、市中とは違った別の河（ひょっとすると別ではなく、その上流か下流かもしれない）が流れていて、そのほとりには田圃があり、一面に草の生えている原っぱがあった。その薄暗い夕闇の中を、大きい螢が明滅する火をともし、とび交っていた。

山口の螢は大きい源氏螢で、無数に空間をかすめるのを、竹の輪につけた手拭の袋で捕ったり、団扇ではいたり、風にのって流れるのを追ったりする。

「あっ」

「佐々木さん、早く、はやく」という声が、河べりで上がり、

「落ちた、勝ちちゃんが、井上さん、おゆきさん、井上のおかあさん、井上さん……」と、けたたましく叫ぶ声が一斉に上がり、そのあたりの人が総立ちになった。

私の側にしゃがんで、草の葉にとまっている螢に手を出していた母が、手を止めて急に立った。そして一瞬あと、叫び声の中心に向かってすすたと、だが、走らずに歩いて行った。なぜか私は、母と一緒にいて行かず、その後姿に目を据えていた。事の成行きを見定めていたという気がしてならない。

ひょっとすると、そのような奇妙な癖が、そのとき私に芽生えたのかもしれない。私の側には、行儀見習の千代さんだけが、離れずに付いていた。

やがて私も河のふちに来てみると、すぐ側にいて真先に水にとび込んだ史朗さんが、ぐしょ濡れになった兄の勝彦を抱きかかえ、岸から手をさし伸べている父に、流れの中から渡しているところであった。

ほとんど水も飲んでいなかったせい、勝彦兄は声も立てず、されるままになっていて、顔を近付けてのぞき込む母に、少しはにかんで顔をゆがめた。

螢狩りもそんな騒動で早々に切上げ、あちこちから集まった人々もおおかたは散会したあと、史朗さんは一緒に来てわが家に泊った。袴も着物も濡らしたので、やむを得なかったといえ、いつも来て泊るので珍しくはなく、私と蒲団を並べて寝た。

だが、幼児の印象は非常に奇妙なもので、その日ごろの記憶はそれぎりで跡絶え、あとは約半年も過ぎた後河原にとぶのであった。

二 河沿いの家

カナコゾから後河原に移転したのはいつなのか、私には引越しの覚えは何一つない。それは全くいつの間にかである。わが家は河に臨んでいて、対岸から隣家との共同の橋が、架かっていた。

山口の町の中を流れる河には、必ずのように両側に道があるのに、わが家のあたりが違っているのを、子供心に何故だろうかと思っていた。

おそらくそれは引越して間もない、梅雨ごろのことであつた。大雨のあと急に洪水になり、わが家に渡る橋の上にも水が越し、表の門が閉ざされて、その中側に土囊が積まれた。

ふだんは一応閉まっている隣家との境の戸は開けられ、孤島のようになった両家は、お互いに励まし合っていた。

「ジョンがさっき、橋の向こうまで来ていた」という声が、私と兄を驚かせた。お隣のジョンは繋いであると思っていたのに、そうではないのであつた。

その犬は何種だったのであろうか、耳が垂れた大型の洋犬で、犬と子供はすぐ友達になれるので、仲よしだった。

「ジョンは何度も渡ろうとして、すぐ側まで来たけれど、橋の方へ脚を入れそうになつては引っこめ、河上の方へ駆けて行つた」という話である。

自分の家の前まで来ているのに、渡れないほどだから、どこまで行っても渡れるはずはない。きつと水に流されていなくなってしまうだろう、と心を痛めていた。すると、

「ジョン、ジョン、お帰り……」という、お隣のおばさんの声が急にきこえた。そうたいして長くは経たない間のことであつたが、非常に長くおもえた。

玄関の庇の下にすぐ出た私たちの側に、その犬が走り寄つた。そして何度か鳴き、その辺を走り廻つたり、とびかかったりしたあげく、やっと落着いて静かになった。

家の裏には、背後の方へ抜ける路があつたのだった。そんな抜け路があるとは、ふだんはほとんど気付かなかつたが、その路をちゃんと知つていて、危険を冒して元氣に駆け戻つて来たジョン——というよりも犬を、私は非常に利巧だと思つた。

母の兄に当たる叔父の営んでいる福川の岩崎薬店から、さきに挙げた千代さんという娘が、行儀見習という名目で、長い間私の家に来ていた。

一度お嫁に行ったが戻って来たということを、誰かが話しているのを聞いて、私は心得ていたが、その心得というのは、心の中に仕舞っておけばよいことで、そんなことを無闇に口に出してはいけない、というようなことであつた。

いろいろ雑用はするけれど、女中さんというわけではない、家族の一員として、特に私の世話を、物心のついた時から、ずっとしていた。

母とはぼ同じ年頃であつて、教会の付合いや、幾つもの稽古ごとで、出て行くことの多い母に代つていたので、はたからは千代さんが私の母親のように見られることもあつたようだ。

だが、後河原の生活が始まつて間もなく、幼稚園に行くようになって、私は毎朝、父と一緒に家を出た。「もう自分は小さい子供ではない」と、千代さんに世話をかけてはいけないように、自分で思った。

わが家の石橋を渡つて向こう岸に行くと、橋の袂に大きい柳の木が枝を垂れていた。そういえば柳の木はそこばかりではなく、河上にも河下にもずっと河端に生えていた。

父親と二人だけという存在感に、私は自身を一人前だと感じていたらしい。父は私に歩調を合せて、ゆっくりと歩いていたのだろうが、私は父に残されまいとして、時には先に駆けたりもしていた。

左右に抜ける道に通じる幾つもの橋の袂に、必ずといってよいほど地藏さんの祠があり、石

に刻んだその像の前に花立があつて、赤いヒナゲシの花が活けてあつた。

寂びた石の地藏さんと鮮かな赤いヒナゲシは、奇妙にびったりと合つていて、次の祠の前でも私を振りかえらせた。すると、その地藏さんの前にも同じように、赤いヒナゲシが挿してあつた。

この情景は次の日も、その次の日も全く同じであつた。私はだんだん、地藏さんには赤いヒナゲシが活けてあるものだと思ひ込むようになり、慣れっこになつて、やがて振り向かなくなつた。

そうして忘れ果ててしまつたのは、もうその花もなくなり、毎日誰かが立てることもできなくなつてからであらう。

だが、その後、山口の河を想ひ出すと、橋の袂の祠にある石の地藏さんと、赤いヒナゲシの花が浮かんだ。

河に沿つて行くと、兩岸の道に並ぶ家並みの屋根は低く、その上にひろがる空に抜き出るものは、ほとんど無い。

ふだんの河は水もせせらぐほどで、沢山の小石に堰かれて白い泡を立て、その間をドンコ（ゴリに似た小さい淡水魚）がかすめて、また小石の下に潜つていた。

父と私はその朝陽の射す河沿いの道を上つて行く。そして、幾つめかの橋に達すると、そこ

から上流は、両岸が河に迫っていたようにおもえる。

その橋を私は右に渡り、やがて一つ目の道を左に曲ると、その行手に新しく入った明星幼稚園がある。

その同じ橋の所から左の方に向かう道を行けば、お寺かお宮の梅の木の沢山ある庭の前をすぎて、県庁のあるお城に達する。県の教育をあずかる官吏であった父は、毎日そこに勤めていたのであった。

幼稚園児になった最初のころ、私は毎日母か千代さんに送り迎えされていたけれど、そのうち父と一緒に出かけるようになって、帰るときは独りであった。

最初の日、父はその橋の袂でとまり、

「行っておいで」と言った。それはいかにも、そこから私を独りで行かせる儀式であった。

私はそれを期待していたように、

「はい」と応えて橋の向こうまで行ったが、そこで無意識に後を向く。父はまだ元の所に立って見送っている。私は、

「行って来ます」と声を立て、弁当の入れてある袋を振り廻して駆け出した。

「いけない、走ってはいけない」と、父の声が後から追って来た。